

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

世紀転換期のウィーンとスロヴェニア：
キリスト教社会主義運動とイヴァン・ツァンカル

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): 世紀転換期, ウィーン, スロヴェニア, キリスト教社会主義運動, イヴァン・ツァンカル キーワード (En): 作成者: 宍戸, 節太郎, Shishido, Setsutarō メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000190

世紀転換期のウィーンと スロヴェニア

——キリスト教社会主義運動と イヴァン・ツァンカル

宍戸節太郎

イヴァン・ツァンカル (Ivan Cankar, 1876-1918) は、文筆だけで生計を立てた、スロヴェニア最初の作家であり、現代スロヴェニア文学の祖として、広く親しまれている。1896年、現在のスロヴェニアの中核地、クライン州の州都リュブリャナで、大学入学資格試験マトゥーラ (Matura) に合格し、この年秋オーストリア=ハンガリー帝国の帝都、ウィーンに上京する。当初建築 (Hochbau) を学ぼうと、工科大学で入学手続きをするものの、すぐに専攻をロマンス語文学 (Romanistik) とスラヴ語文学 (Slawistik) に変え、⁽¹⁾文学サークル、スロヴェニア文学クラブにも参加している。大学に在籍したのはわずか1学期間だけで、翌97年3月には、母ネジャ (Neža Cankar, 1843-1897) の最期を看取るべく、リュブリャナから西方30キロほどのヴルフニカに帰郷する。ネジャが9月23日に亡くなると、ツァンカルは、彼の最初の詩集『エローティカ』 („Erotika“, 1899) の報酬を前払いで受け取り、葬儀費用に充てた。ツァンカルこのとき21歳、職業作家として最初のまとまった収入だったと思われる。

1898年11月、ツァンカルは再びウィーンに上京する。ただし、ツァンカルが学業に復帰することはなく、創作のかたわらリュブリャナ発行の日報紙、リベラル系の『スロヴェンスキ・ナーロト』 („Slovenski narod“, 1868-1945) や、カトリック系の『スロヴェーネツ』 („Slovenec“, 1873-1945) の文芸欄にも、記事を寄せている。『スロヴェンスキ・ナーロト』の文芸欄は、97年初め以降、スロヴェニア文学クラブのメンバー、フラン・ゴヴェカル (Fran Govekar, 1871-1949) が担当責任者を務めている。『スロヴェーネツ』の編集者には、ヤネス・エヴァンゲリスト・クレク (Janez Evangelist Krek, 1865-1917) がおり、クレクは、スロヴェニア・キリスト教社会主義運動の創始者、指導者、そして中心的運営者だった。⁽²⁾ ツァンカルは1907年5月、社会民主党候補として帝国議会議員選挙に立候補し、落選する。とはいえ、ウィーン時代のツァンカルの行動には、政治的党派性よりも民

族的、言語的結びつきがより強く感じられる。

ウィーンには多くの民族が暮らし、文字通り多言語、多文化の世界が形づくられていた。1860年から1900年にかけて、ウィーンの人口は2.5倍に膨れ上がり、1900年の統計によれば、人口は167万4,957人、うちウィーンで生まれた者の数は、その半分に満たなかった。⁽³⁾ 使用言語による内訳は、ドイツ語使用者が36%・約60万人、チェコ語が23%・約39万人、ポーランド語使用者が17%・約28万人、ウクライナ（ルテニア）語13%・約22万人。それ以外にもスロヴェニア語、セルビア・クロアチア語、イタリア語、ルーマニア語、ハンガリー語を話す人々が暮らしていた。使用言語による内訳には、ユダヤ人という分類はないものの、ユダヤ人の大部分はドイツ語使用者の中に含まれ、宗派別の統計から見ると割合は8.8%、数にして約15万人と、彼らもまた大きなマイノリティーだった。⁽⁴⁾

1994年以降、ツァンカル作品の多くのドイツ語訳を手掛けたエルヴィン・ケストラー（Erwin Köstler, 1964-）は、「世紀転換期の、じつに活発なウィーンにおいて、スロヴェニアの作家たちがいつも自分たちの間の交流にとどまっていたのは興味深い」、⁽⁵⁾と指摘する。ケストラーはツァンカルについても、その行動の特異さをこう述べる。

ツァンカルについて見ても、彼がドイツ語作家たちとの間に交流を持ったというのは知られていない。彼は（クラインの現状についての）政治的な論評、議論をドイツ語で書き、公の生活に参加していた。ウィーンの文学界で彼はただし、いつもその周縁にとどまった。⁽⁶⁾

ツァンカルとは対照的に、リュブリャーナの文学サークル「ザードゥルガ」（Zadruga）以来の盟友、オトン・ジュパンチッチ（Oton Župančič, 1878-1949）は、スロヴェニア文学クラブをはじめ、ウィーンでもツァンカルと行動をともにしながら、分離派やウィーンの文士たちとも親密な交流を持った。

ツァンカルは、多言語、多文化のウィーンにあって、あえてなぜスロヴェニア語の世界にとどまろうとしたのだろうか。本稿では、世紀転換期のウィーンとスロヴェニアの政治と社会状況を、イヴァン・ツァンカルの視点から概観、整理しながら、ツァンカルの行動の内的要因を探ってみたいと思う。以下、キリスト教社会主義運動とツァンカルとの関わりから見ていく。

1. キリスト教社会党の誕生

イヴァン・ツァンカル 2 度目のウィーン滞在は、1898年11月から1909年9月までの、おおよそ10年余りになる。この間ウィーンは、カール・ルエガー（Karl Lueger, 1844-1910）が市長を務める、オーストリア・キリスト教社会主義運動の、

まさに全盛期だった。ルエーガーの市長在任期間は、1897年4月から、彼が亡くなる1910年3月までの長期にわたり、ほぼまる13年におよぶ。

1890年前後のオーストリアでは、共通の目標を掲げ、社会的意思決定に参加すべく、帝国内で政党や結社の創設が相次いでいる。「キリスト教社会党」(Christlichsoziale Partei)は、カール・ルエーガーの指導のもと、「キリスト教徒連合」(Vereinigte Christen)、「キリスト教社会連盟」(Christlichsozialer Verein)、「キリスト教社会労働者連盟」(Christlichsozialer Arbeiterverein)の、いずれもキリスト教社会主義運動団体3団体を母胎に、1893年に結成された。⁽⁷⁾

そもそもキリスト教社会主義運動は、1818年リーグニッツ (Liegnitz、現ポーランド、レグニーツァ (Legnica)) 生まれの、カール・フォン・フォーゲルザング (Karl von Vogelsang, 1818-1890) に由来する。フォーゲルザングは1874年ウィーンに移り、翌75年からカトリック系保守新聞『祖国』 („Vaterland“) の編集を担当、79年には『キリスト教社会改革のための月刊誌』 („Monatsschrift für christliche Sozialreform“) を創刊している。フォーゲルザングは、自由主義的、資本主義的社会秩序がもたらした弊害を正すべく、キリスト教中世を念頭に、手工業組合や同業者組合といった、職能身分団体創設などの施策を通じて、中産労働者階層の利益保護、社会再編の必要性を説いた。⁽⁸⁾

のちに政治家として姿を現す、アドルフ・ヒトラー (Adolf Hitler, 1889-1945) もまた、ウィーンにおけるキリスト教社会主義運動の証人の一人である。ヒトラーは1907年、画家を志し、ウィーンに上京した。キリスト教社会党についてヒトラーは、『我が闘争』 („Mein Kampf“, 1925-1926) の中で述べている。

キリスト教社会党は、大衆の意義に対する必要な理解を有し、発足の日から社会的性格を明確に強調することによって、少なくとも大衆の一部を自らに確保していた。彼らは本質的なやり方で、小・下層中産、手工業階級の獲得に照準を合わせ、忠実かつ忍耐強く、献身的な信奉者を手に入れた。キリスト教社会党は、宗教団体に対するいかなる闘争も回避し、それにより元来強靱な組織である、教会の支持を確保した。⁽⁹⁾

自由主義、資本主義体制下で、ヒトラーの表現によれば、「生存を脅かされた」⁽¹⁰⁾ 中産労働者階層と、影響力の低下したキリスト教、カトリック教徒たちを利するよう、キリスト教社会党の批判の矛先が、ウィーンのユダヤ人たちに向けられた。

2. キリスト教社会党と反ユダヤ主義

1867年、皇帝フランツ・ヨーゼフ (Franz Joseph, 1830-1916) により立憲主義体制が裁可され、オーストリアでは政治に対する宗教の影響力が弱められた。これ

により実質的にユダヤ人の社会進出の障害が取り除かれ、以後ユダヤ人たちが政治ばかりでなく、あらゆる分野でオーストリア社会の牽引車になっていった。⁽¹¹⁾ 憲法第14条には、次のように信教の自由が保障されている。

信教および良心の完全な自由は、すべての者に保障される。
市民的および政治的権利の享受は、信仰告白に左右されない。しかしながら、国民の義務は信仰告白により損なわれてはならない。
当該法により認められた他者の権能に従う場合を除き、何人も教会の聖式、または教会の式典への参加を強制されない。
Die volle Glaubens- und Gewissensfreiheit ist Jedermann gewährleistet.
Der Genuß der bürgerlichen und politischen Rechte ist von dem Religionsbekenntnisse unabhängig; doch darf den staatsbürgerlichen Pflichten durch das Religionsbekenntniß kein Abbruch geschehen.
Niemand kann zu einer kirchlichen Handlung oder zur Theilnahme an einer kirchlichen Feierlichkeit gezwungen werden, in sofern er nicht der nach dem Gesetze hiezu berechtigten Gewalt eines Anderen untersteht.⁽¹²⁾

1981年にノーベル文学賞を受賞した、ユダヤ系ドイツ語作家・思想家のエリアス・カネッティ (Elias Canetti, 1905-1994) もまた、自伝『眼の戯れ 伝記 1931-1937』 („Das Augenspiel. Lebensgeschichte 1931-1937“, 1985) の中で、「皇帝フランツ・ヨーゼフは、ユダヤ人たちから庇護者と見なされていた」、⁽¹³⁾ と述べている。

ウィーンのユダヤ人人口は当時、他のドイツ語地域のどこよりも大きかった。19世紀半ば、ウィーンにユダヤ人は6,000人強しかおらず、人口の2%程度に過ぎなかった。ユダヤ人人口は1900年には14万6,926人、10年後の1910年になると、ウィーンの総人口203万1,498人のうち8.6%、17万5,318人に膨らんでいる。歴史的にもユダヤ人は、医師や弁護士、特殊技能を持った職人などの専門職、学術、芸術、ジャーナリズム、商業、金融業など、非常に大きな存在感を示してきた。ユダヤ人が、リベラルな社会とドイツ文化に同化すべく、多大な努力を費やした結果だった。⁽¹⁴⁾

しかし、ウィーンのユダヤ人の誰もが、自らに活躍の場を見出したわけではない。ウィーンにはユダヤ人貧困層もまた存在した。ユダヤ人の多くは、ハンガリーやチェコ西部のボヘミア、ポーランド東南部からウクライナ北部にわたるガリツィアからの移住者、またかつてロシアのボグロムを逃れてきた人々の子孫だった。進んで受け入れられることなく、憎悪の対象となったユダヤ人貧困層の間では、マルクス主義やシオニズムも関心を集め、ユダヤ人は資本主義の搾取者と見なされたもう一方で、危険な社会改革者の汚名も着せられた。⁽¹⁵⁾ イアン・カーショー (Ian Kerschaw, 1943-) は、著書『ヒトラー 上 1889-1936 傲慢』 („Hitler

1889-1936: Hubris“, 1998) の中で述べている。

ユダヤ人貧困層は旧市街か、ウィーン北部の荒廃した地域に住んでいた。古くからゲットーのあったレオポルトシュタットでは、住人の3分の1はみすぼらしい身なりのユダヤ人であり、伝統的なカフタンに黒い帽子をかぶった小商人と行商人がその中心だった。ヒトラーがウィーン時代の後半3年間を過ごしたとされる陰鬱な地区ブリギッテナウはこの近くだが、ここの住人も約17%はユダヤ人だった。これが、ヒトラーが人種憎悪に染まったとされる環境である。⁽¹⁶⁾

カーショーに従えば、「職人層が経済的地位の低下に悩み、その怒りをユダヤ人資本家と裏町にはびこるガリツィア出身の〔ユダヤ〕行商人の双方に向けていくなかで、反ユダヤ主義は急激に勢いを増しつつあった」。⁽¹⁷⁾

キリスト教社会主義運動の拡大を図る、1890年、カール・ルエーガーの演説を引いてみよう。

私は諸君に尋ねます。穀物取引がもっぱらユダヤ人の手に委ねられているのは、あなたがたのせいですか？ キリスト教徒の農民のせいですか？ あるいはキリスト教徒のパン屋のせいですか？ 動産や不動産の利益がもっぱらユダヤ人の手に落ちるのは、キリスト教徒の国民のせいですか？ 大部分の既製服業者がユダヤ人であるのは、キリスト教徒の仕立屋のせいですか？ ウィーンの50%を越える弁護士が、医者的大部分がユダヤ人であるのは、キリスト教徒のせいですか？ 我々はそれについて一切責任などありません。反ユダヤ主義の行動というのは、つまり起こるべくして起こったわけです。⁽¹⁸⁾

二者択一的に思考を誘導し、「我々」(wir) キリスト教徒、正確にはカトリック教徒の側から、自営業者、職人層など、中産労働者階層の利害に訴えている。ルエーガーが運動の拡大に利用したのは、政治的手段としての反ユダヤ主義、政治的、経済的反ユダヤ主義だった。ルエーガーの反ユダヤ主義は、のちにヒトラーへと受け継がれた。

1895年9月26日、それまで64議席だったキリスト教社会党は、市議会議員選挙で、138議席中92議席を獲得して躍進を遂げ、圧倒的な多数派を占めるにいたる。これにより1861年以来、ウィーン市議会です30年以上続いてきた、リベラル派による支配が幕を閉じた。⁽¹⁹⁾ 97年4月16日、カール・ルエーガーは、念願のウィーン市長に就任する。運動の拡大は、ウィーンにとどまらず、オーストリア各地へ波及している。

穀物取引業者や土地投機業者を批判し、キリスト教社会党は反ユダヤ主義を梃

子に、ウィーンを囲む低地オーストリアの農村、アルプス東部のティロールでも、農民の支持を獲得する。ボヘミアやチェコ東部のモラヴィアでは、1894年にキリスト教社会党が創立され、スロヴェニアでも1892年にカトリック民族党 (Katoliška narodna stranka/Katholische Nationalpartei) が結成された。⁽²⁰⁾ 農村部におけるキリスト教社会主義運動の拡大について、A・J・P・テイラー (Alan John Percivale Taylor, 1906-1990) は説明している。

キリスト教社会党は、ルエーガーに組織されたが、大衆と共に進もうという、教会の初めての試みであり、ドイツの片割れである〔カトリック〕中央党より民主的で、そしてデマゴギー的であった。キリスト教社会党は、農民の伝統的な教権主義に訴えたり、また農民を地主への依存から解放した。その上、キリスト教社会党は、農民が都市に敵意をもっているにもかかわらず、農民を大産業の進展によって脅かされた店主・職人と同盟させた。⁽²¹⁾

キリスト教社会主義運動の大波は、ゆっくりと時間をかけ、スロヴェニア人居住地域のみ込んでいった。

3. 都市社会主義とルエーガー市政

市長在任中のルエーガーの施策は、「都市社会主義」とも呼ばれる。ウィーンでは、都市生活の基盤である社会資本整備を通じて、大規模な都市改造が行われた。電気、ガス、水道、公共交通機関など、公益事業を市有、市営化し、都市全体としての社会改良が目指された。ルエーガー市政を詳述する田口晃『ウィーン都市の近代』(2008年)は、世界各地で見られた都市社会主義のなかでも、ルエーガーのウィーンが、その「最も大掛かりな例」⁽²²⁾であるとしている。

貯蓄銀行の創設や、市営の無料職業紹介所の設立、新設70校を含む計100校の小学校の整備、1902年から04年にかけては、当時ヨーロッパ最大、最新の老人ホームが建設されるなど、ルエーガーの施策は多岐にわたる。1896年に75ヘクタールだったウィーンの公園の面積は、1910年には170ヘクタールと2倍以上の面積に拡大し、都市の景観、市民生活に大きな変化をもたらされた。⁽²³⁾

ツァンカルの従弟イジドル・ツァンカル (Izidor Cankar, 1886-1958) によれば、⁽²⁴⁾ 1902年から1903年にかけて書かれたとされる、ツァンカルのドイツ語詩が残されている。

RUHEBEDÜRFNIS

安らぎの欲求

Ein Gaskandelaber steht einsam
vor der Oper am Opernring.
Ihn schläfert: die Tramwayglocken,
die machen: kling-kling-kling.

ガス灯がぼつんと一人で
オーペルリングのオペラハウスの前に。
路面電車の鐘が、眠いところへ、
やってくる、チリン、チリン、チリン。

Da sagt der Gaskandelaber:
Das ist doch wirklich nicht schön,
daß ihr da fortwährend klingelt,
ich möchte schon schlafen gehn! -⁽²⁵⁾

さてガス灯が言う。
それにしたってひどいじゃないか、
きみたちひっきりなしにチリンチリン、
ばくだってもう寝たいんだから！—

市長就任後、ルエーガーが最初に手がけたのがガス事業の全面的な刷新であり、ウィーンでは当時最新のガス供給網が急ピッチで整えられた。1899年10月31日、ウィーンのリング大通りの照明は、以前とは見違えるほどに明るくなったという。ツァンカルが詩に描いているのは、いつも路面電車に安らかな眠りを邪魔される、この「ガス灯」である。⁽²⁶⁾市内交通の電化作業は1898年1月から始められ、旧市内に関しては、1902年初頭までに全線で完了している。その後も広範な拡張と利便性の改善が図られ、ウィーンは、「ヨーロッパで最も整備された市電網を誇るようになって今日に至っている」。⁽²⁷⁾

しかしながら、ルエーガーの都市社会主義が、ウィーン市民すべての幸福と安寧を目指したわけではない。ルエーガー市政が目指したのは、キリスト教社会党支持者の幸福だった。市役所の職員、労働者の数は、1896年の4,760名から、1910年の2万5,151名と増加し、併せて自由主義体制下に比べて高級職が増加、現業労働者にも各種保険、年金が整備される。市営住宅はほぼ市役所の職員住宅

であり、人事採用、公共事業の受注、公共機関への物品の納入など、市民生活のさまざまな局面で、キリスト教社会党支持者に利益がもたらされた。⁽²⁸⁾田口晃が、ルエーガーの意思を明確に示した発言を紹介している。「ユダヤ人と社会民主主義者は市の職員に採用しない」。⁽²⁹⁾ツァンカルは無論、ルエーガー市政の利益がもたらされる側ではなかった。

ツァンカルは1913年夏、「いかにして私は社会主義者になったか」(Kako sem postal socialist, 1913)の中で、自らが社会民主主義に身を投じるにいたった経緯を振り返っている。ウィーンに上京前のツァンカルは、「社会主義についてなど何も知らず、社会民主主義に関する知識は、それが一種の政治的セクトであり、いわば教会や国から排除され、警察や検察があらゆる面から監視しているという程度のものであった」(O socializmu nisem vedel ničesar, o socialni demokraciji pa le toliko, da je nekakšna politična sekta, ki je takorekoč izobčena iz cerkve in države in ki jo stražijo od vseh strani policisti in državni pravdniki)⁽³⁰⁾という。ツァンカルもまたここに、ウィーンで出会ったルエーガーのむき出しの台詞を、ドイツ語で書き留めている。「5月1日にプラターに向かって列をなす子どもなど、レンペンばかりだ！」(Die Leute, die am ersten Mai in den Prater ziehn, sind lauter Lumpen!)。⁽³¹⁾「レンペン」(Lumpen)はドイツ語で「ぼろ切れ」の意で、転じて「ぼろを着た浮浪者」、「ならず者」を指す。

1890年5月1日、8時間労働制実現を目指した労働者の国際的なデモ、第1回メーデーがウィーンでも開催された。日頃から社会主義者を無政府主義者、無神論者として危険視していた市民たちは、メーデーで暴動が起きるのを恐れていた。市内には、警察ばかりか砲兵隊も警備に配置され、ウィーンはものものしい雰囲気にも包まれたという。メーデーを指揮したヴィクトル・アードラー(Viktor Adler, 1852-1918)は、当局および軍隊批判を理由に、4ヵ月の禁固刑を受け収監されていた。アードラーは刑務所から、初めてのメーデーを指揮した。デモ行進は、郊外から市民階級の居住区を通して、プラター公園まで整然と行われ、市民たちが恐れていたことは何一つ起こらなかった。⁽³²⁾村山雅人は著書『反ユダヤ主義——世紀末ウィーンの政治と文化』(1995年)の中で、ここに「やがて到来する一つの新しい時代の兆候」⁽³³⁾を見ている。ツァンカルが書き留めた上のルエーガーの台詞はただし、ルエーガー、そしてキリスト教社会党支持者の目にはやはり、これらの労働者たちがただの「ならず者」たちだったのであり、次の時代への道のりが、決して平坦ではなかったことを伝えている。

4. スロヴェニアにおける政治と社会状況

ドイツ語でのコミュニケーションであれ、スロヴェニア語でのコミュニケーションであれ、必ずしも居心地がよかったとは思われない異郷の地で、ツァンカ

ルはそれでもスロヴェニア語で書きつづけ、スロヴェニア語による新たな言語表現の可能性を模索していた。ツァンカルにとってスロヴェニア語は、単なる道具などでは決してなく、自分が自分であり続けるための、自分が世界とつながりを保持するための、代替不能な唯一の方法だった。

とはいえ、ウィーンに暮らし、スロヴェニア語で創作をつづけるツァンカルを、スロヴェニア人の誰もが好意的に受けとめていたわけではない。スロヴェニアの人々にとって当時、「ウィーンとは、健全な庶民感覚に促せば、道徳的にだらしのない、汚らしい文学の所在地」⁽³⁴⁾であり、ツァンカル自身ときに、ただウィーンに住んでいるというだけの理由で、「デカダンス」(dekadenca) だとして非難され、⁽³⁵⁾「スロヴェニアに関する事柄に意見を言う権利を疑問視された」。⁽³⁶⁾ケストラーは、ツァンカルの文学に向けられた非難を、こう説明している。

同時代のスロヴェニアの批評家たちが、彼の書物には「肯定的理念」(positive Idee) が欠けている、そうイヴァン・ツァンカルを非難したのは、よく知られた事実であり、それはドイツ語圏での翻訳でも、すでに言われている。この非難は、文学の質を教会の道徳観念で判断する、聖職者の側からばかりでなく、作家の民族的熱狂を価値の尺度とする、リベラル派からも浴びせられた。ツァンカルは、文学がイデオロギーの投影対象に、また芸術家が民族的関心事の名誉労働者に格下げされる、このようなそもそも芸術敵対的な功利主義と闘っていた。⁽³⁷⁾

ツァンカルの作品はすでに1900年にはドイツ語訳が見られ、生前からほぼ時間差なくドイツ語に訳され紹介されていた。1899年には、完成後2年を経て、ツァンカル最初の抒情詩集『エローティカ』も、ようやく出版にこぎつけている。しかし、ウィーンのツァンカルのもとには、リュブリャーナのイエグリッチ司教 (Anton Bonaventura Jeglič, 1850-1937) が、全1,000冊の発行部数のうち、入手可能な700冊すべてを買い取り、司教館で焼却処分させたという衝撃的な一報も届けられる。⁽³⁸⁾

ツァンカルがキリスト教会と反目し合っていたわけではない。むしろツァンカルのカトリック信仰の敬虔さについては、ツァンカルの全集版編者の一人フランツェ・ベルニク (France Bernik, 1927-2020) を初め、多くの指摘があり、⁽³⁹⁾マリア・ヴェラ・クラリチーニ (Maria Vera Claricini, 1946-) は、「家族の生活は、父の失業のため絶えずまったくの窮乏に脅かされ、厳格なカトリック信仰と、母の献身により規定されていた」⁽⁴⁰⁾としている。スロヴェニアの教科書に頻繁に採用され、スロヴェニア人にとって最もなじみ深いとされるツァンカルの掌編、「一杯のコーヒー」(Skodelica kave', 1910) には、カトリック信仰の精神的、文化的背景なくして成立しない、昇華された作品世界が構築されている。⁽⁴¹⁾

「いかにして私は社会主義者になったか」の中で、ツァンカルは冒頭に挙げたクレクについて、最初のリュブリャーナ時代を振り返りながら、述べている。「民主的な教権派政党はあの時代まだ存在していなかった。クレク博士がようやくその使徒たちを育てていた」(Demokratične klerikalne stranke v tistih časih še ni bilo; doctor Krek je šele vzgajal njene apostole)。(42)ツァンカルはここで、「民主的な」(demokratičen)という形容詞を添えて、クレクの活動を、それまでのカトリック民族党のそれと区別している。ツァンカルよりも11歳年長のクレクは、リュブリャーナの神学校で教師をしていた。(43)クレクはこののち、スロヴェニアのキリスト教社会主義運動において、中心的な役割を果たしていく。

スロヴェニア人の住む地域は、オーストリア＝ハンガリー帝国が最終的に解体する1918年まで、概して農村的性格を保持し続けた。ペテル・ヴォドピヴェツ(Peter Vodopivec, 1946-)によれば、1910年の段階で、人口の67%が農村部に暮らしており、「ハプスブルク君主国のなかでも、著しく工業化の遅れた地域」(44)に属していた。クレクは、1897年から1900年と、1907年から1917年の間、カトリック民族党所属の帝国議会議員、また1901年から1917年までは、同じくライン州議会議員を務めた。(45)クレクは1894年にはすでに、ドイツの農業組合指導者、フリードリヒ・ヴィルヘルム・ライファイゼン(Friedrich Wilhelm Raiffeisen, 1818-88)を参考にしながら、農業組合、貯蓄銀行、貸付金庫の創設に着手している。クレクの組合制度は、農家の断絶や農場の売却、農村から働き手が流出するのを防ぎ、同じくクレクの主導により創立された職業学校と連携しながら、スロヴェニア人居住地の、農業の近代化を加速した。(46)

カトリック民族党は、1905年に「スロヴェニア人民党」(Slovenska ljudska stranka/Slowenische Volkspartei)と改称し、スロヴェニア語使用地域の農村部で多数派を形成した。また、労働者・自営業協会、広範なカトリック文化団体のネットワークを築き、比較的小規模な都市や商業地でも次第に影響力を増した。(47)クレクは、「農民や労働者が、十分に組織された自己防衛措置によってのみ、貧困の魔の手から解放されるという信念」(48)に基づき、カトリック労働者団体、農業労働組合の結成に精力を注いだ。彼が会長を務めたスロヴェニア・キリスト教社会労働者連合には、1913年、462の労働者団体が所属し、加入者数は4万人を超えた。(49)

しかし、ウィーンのキリスト教社会党と異なり、カトリック民族党／スロヴェニア人民党がスロヴェニア政治の中心を占めるまでには、長い時間を要している。カトリック党に遅れること2年、リベラル派は1894年に民族党(Narodna stranka/Nationale Partei)(1905年民族進歩党(Narodno napredna stranka/Nationale Fortschrittspartei)に改称)を結成する。彼らは中間市民層の支持獲得を目指して、都市や比較的大きい商業地に候補者を擁立し、農村部ではリベラル派でも教権派でもない、「独立候補」を支援した。1896年、ラインで民族党指導部は、形勢優位のカトリック党に政権を委ねるのでなく、ドイツ人たちとの同

盟を選択する。スロヴェニアにおける、このリベラル派とドイツ人大土地所有者との連立は、クライン州議会で1908年まで多数派を保持した。⁽⁵⁰⁾

クレクはこの間も積極的な社会参加を続け、カトリック党の支持は拡大する。一方、民族党を擁するリベラル派は、市民層への片寄った支援が若い知識人や学生たちの反発を招き、次第に弱体化していった。⁽⁵¹⁾「いかにして私は社会主義者になったか」でツァンカルは、民族進歩党について述べている。「スロヴェニア小市民階級の代表者たる民族進歩党は、すでに長い間腐臭を発していたが、その臭いはますますひどくなっていた」(Narodno-napredna stranka, zastopnica slovenskega malomeščanstva, je že dolgo smrdela po trohnobi in je smrdela zmerom bolj)。⁽⁵²⁾

もちろんリベラル派は1848年の革命以来、長い間民族の権利、スロヴェニア人居住地の統一、スロヴェニアの自治を求めて戦ってきた。⁽⁵³⁾彼らもまた農民の支援を訴え、労働者のための同業者団体を設立し、カトリック党同様、露骨な反ユダヤ主義的言辞まで使って、支持の拡大を目指している。⁽⁵⁴⁾ただし、ヴォドピヴェツも指摘するように、スロヴェニア人居住地のユダヤ人の数は、「ごくわずかな小さな」⁽⁵⁵⁾ものに過ぎなかった。スロヴェニア人の占める割合が最も高い、クラインの1910年の統計では、人口520,327人のうち、スロヴェニア系が94.36%、ドイツ系5.36%となっており、⁽⁵⁶⁾政治的手段としての反ユダヤ主義、政治的、経済的反ユダヤ主義は、そもそも最初から実効性を欠いていた。クライン州議会における、スロヴェニア・ドイツ・リベラル同盟は、ウィーン市議会よりも13年長くリベラル派を生きながらえさせたものの、スロヴェニアの一般大衆には受け入れられなかった。⁽⁵⁷⁾若年層のリベラル派離れが加速し、民族党／民族進歩党の世代交代は失敗に終わっている。

他方、スロヴェニア人民党は、1907年の帝国議会第1回普通選挙で、クレクも帝国議会議員に復帰し、スロヴェニア人議席のほぼ4分の3を獲得する。1908年には、新たな選挙制度のもとで、クライン州議会でも絶対的多数を占めるにいった。だが、スロヴェニア人民党が目指したのも、すべてのスロヴェニア人の幸福と安寧だったわけではない。学校が文化闘争の、最も重要な戦場の一つになったこの時代、たとえばこれは、小学校が事実上再び教会の管理下に戻ったことを意味した。すぐに、自由主義的志操を持った教員に対する、新聞、雑誌上での反対キャンペーンが開始され、スロヴェニア人民党を支持する教員へは、税、および住宅補助の、優遇措置が取られた。⁽⁵⁸⁾ウィーンのキリスト教社会党同様、スロヴェニア人民党が目指したのも、党の支持者の幸福だった。ツァンカルはそれでも、クレクの死に当たって、スロヴェニアに遺した彼の生涯の功績を称え、クレクの死を悼んでいる。「クレク博士がもういないという、つらい知らせがスロヴェニア民族に衝撃を与えたとき、誰も胸が張り裂けそうで、私たちはみな、涙で目を曇らせた」(Tisto uro, ko je presunil slovenski narod boleštni glas, da doktorja

Kreka ni več, je zakravelo vsako srce, so se nam vsem orosile oči)。⁽⁵⁹⁾「誰しも(の)」(vsak)、「私たち」(mi) といった、複数の表現を借りながら、ツァンカル自身の悲痛さがにじんでいる。

ツァンカルにとって、民族党／民族進歩党のリベラル派とともにスロヴェニアの未来を思い描くことは、当時の多くの若者たち同様困難だった。リベラル派は民族的熱狂を諷い文句にしなが、求心力あるスロヴェニアの未来を描くことができず、都市に暮らす一部市民層の利益を代表するだけの存在になっていた。カトリック民族党／スロヴェニア人民党の、スロヴェニア・キリスト教社会主義運動は、クレクの尽力の結果、とりわけ農村部でスロヴェニア人の生活を改善し、多くの実際的成果を生み出していた。しかしツァンカルは、1907年5月、落選したとはいえ、社会民主党候補として帝国議会議員選挙に立候補する。ツァンカルの選挙は、リベラル派でも、キリスト教社会主義運動でもない、社会民主主義運動に、彼がスロヴェニアの未来を託したことを意味している。

イヴァン・ツァンカルと社会民主主義運動との関わりについては、次稿、詳細に検討する。

- (1) Vgl. Erwin Köstler: Ivan Cankar: Daten zu Leben und Werk. In: Ivan Cankar: *Materialien & Texte*. Zusammengestellt und aus dem Slowenischen übersetzt von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 2000. S. 142-145. S. 142.
- (2) Peter Vodopivec: Von den Anfängen des nationalen Erwachens bis zum Beitritt in die Europäische Union. In: Peter Štih - Vasko Simoniti - Peter Vodopivec: *Slowenische Geschichte. Gesellschaft - Politik - Kultur*. Aus dem Slowenischen übersetzt von Mag. Michael Kulnik. Graz (Leykam) 2008. S. 217-518. S. 285f.
- (3) イアン・カーショー『ヒトラー 上 1889-1936 傲慢』(川喜田敦子訳、石田勇治監修、白水社、2016年) 59頁参照。Vgl. Ian Kershaw: *Hitler 1889-1936: Hubris*. London (Penguin Books) 2001. S. 31.
- (4) 田口晃『ウィーン 都市の近代』(岩波書店、2008年) 139頁以下参照。
- (5) Erwin Köstler: Vorwort. In: Ivan Cankar: *Vor dem Ziel. Literarische Skizzen aus Wien*. Aus dem Slowenischen und einem Vorwort von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 1994. S. 6-19. S. 17.
- (6) Ebd.
- (7) Vgl. Felix Czeike: *Historisches Lexikon Wien in 5 Bänden. Band 4*. Wien (Verlag Kremayr & Scheriau) 1995. S. 495f. 村山雅人『反ユダヤ主義——世紀末ウィーンの政治と文化』(講談社、1995年)、76頁以下参照。
- (8) Vgl. Felix Czeike: *Historisches Lexikon Wien in 5 Bänden. Band 5*. Wien (Verlag Kremayr & Scheriau) 1997. S. 547f. 村山雅人、79頁以下、田口晃、96頁以下参照。
- (9) Adolf Hitler: *Hitler, Mein Kampf. Eine kritische Edition. Band 1*. Herausgegeben von Christian Hartmann, Thomas Vordermayer, Othmar Plöckinger und Roman Töppel.

- Unter Mitarbeit von Pascal Trees, Angelika Reizle und Martina Seewald-Mooser. München – Berlin (Institut für Zeitgeschichte) 2016. S. 355.
- (10) Ebd. S. 313.
- (11) 村山雅人、14頁以下参照。
- (12) オーストリア共和国「連邦法情報システム」(RIS (Das Rechtsinformationssystem des Bundes))。Auf: <https://www.ris.bka.gv.at/GeltendeFassung.wxe?Abfrage=Bundesnormen&Gesetzesnummer=10000006> (2023年7月22日最終閲覧)
- (13) Elias Canetti: Das Augenspiel. Lebensgeschichte 1931-1937. In: Ders.: *Taschenbuchkassette in 14 Bänden. Band 1*. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch Verlag) 1995. S. 125.
- (14) イアン・カーショウ、59頁参照。Vgl. Ian Kershaw, S. 31f. 村山雅人、6頁以下参照。
- (15) イアン・カーショウ、59頁以下参照。Vgl. Ian Kershaw, S. 32. 村山雅人、6頁以下参照。
- (16) イアン・カーショウ、60頁。Ian Kershaw, S. 32.
- (17) イアン・カーショウ、62頁。Ian Kershaw, S. 34.
- (18) Zitiert nach: Albert Fuchs: *Geistige Strömungen in Österreich 1867-1918*. Wien (Löcker Verlag) 1996. S. 60.
- (19) Vgl. Felix Czeike: *Historisches Lexikon Wien in 5 Bänden. Band 4*. S. 111. 村山雅人、81頁以下、田口晃、104頁以下参照。
- (20) 小沢弘明「第6章 二重制の時代」(南塚信吾編『ドナウ・ヨーロッパ史』(山川出版社、1999年) 218~257頁所収) 236頁参照。
- (21) A・J・P・テイラー『ハプスブルク帝国 1809-1918 オーストリア帝国とオーストリア=ハンガリーの歴史』(倉田稔訳、筑摩書房、2021年) 340頁以下。A. J. P. Taylor: *The Habsburg Monarchy 1809-1918: A History of the Austrian Empire and Austria-Hungary*. London (Penguin Books) 1990. S. 190.
- (22) 田口晃、124頁。
- (23) 同掲書、109頁以下参照。Vgl. Felix Czeike: *Historisches Lexikon Wien in 5 Bänden. Band 4*. S. 111f.
- (24) Vgl. France Bernik: Opombe. In: Ivan Cankar: *Zbrano delo. 2. Erotika 1902 / Neobjavljene pesmi / Nemške pesmi / Dodatek (Pesmi 1895-1914)*. Glavni urednik Anton Ocvirk. Knjigo pripravil in opombe napisal France Bernik. Ljubljana (Državna založba Slovenije) 1968. S. 267- 412. S. 363.
- (25) Ivan Cankar : *Zbrano delo. 2*. S. 139.
- (26) 拙論「スロヴェニア・モデルネの誕生——イヴァン・ツァンカルのウィーン」(國學院大學『國學院雑誌』第121巻第6号、2020年、1~19頁) 6頁以下参照。
- (27) 田口晃、113頁。
- (28) 同掲書、128頁以下参照。
- (29) 同掲書、129頁。
- (30) Ivan Cankar: Kako sem postal socialist. In: Ders.: *Zbrano delo. 25. Politični članki in satire / Govori in predavanja*. Glavni urednik Anton Ocvirk. Knjigo pripravila in opombe napisala Dušan Voglar in Dušan Moravec. Ljubljana (Državna založba Slovenije) 1976. S. 114-121. S. 114. Ders.: Wie ich zum Sozialisten wurde. In: Ders.: *Weiße Chrysantheme. Kritische und politische Schriften*. Aus dem Slowenischen übersetzt, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 2008. S. 286-297. S. 286f.
- (31) Ivan Cankar : Kako sem postal socialist. S. 120. Ders.: Wie ich zum Sozialisten wurde. S.

- 295.
- (32) 村山雅人、92頁以下参照。Vgl. Felix Czeike: *Historisches Lexikon Wien in 5 Bänden. Band 2*. Wien (Verlag Kremayr & Scheriau) 1993. S. 208; Peter Vodopivec, S. 285.
- (33) 村山雅人、93頁。
- (34) Erwin Köstler: Nachwort. In: Ivan Cankar: *Die Fremden. Roman*. Aus dem Slowenischen übersetzt, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 2004. S. 215-237. S. 227.
- (35) 拙論「スロヴェニア・モデルネの誕生」13頁参照。
- (36) Erwin Köstler: Nachwort. In: Ivan Cankar: *Die Fremden*. S. 227.
- (37) Erwin Köstler: Nachwort. In: Ivan Cankar: *Am Hang. Roman*. Aus dem Slowenischen übersetzt, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 2007. S. 283-296. S. 283.
- (38) Vgl. Maria Vera Claricini: Cankars Wien – ein Ausschnitt der Stadt. Das Bild Wiens in der slowenischen Literatur. In: Gertraud Marinelli-König, Nina Pavlova (Hg.): *Wien als Magnet? Schriftsteller aus Ost-, Ostmittel- und Südosteuropa über die Stadt*. Wien (Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften) 1996. S. 393-435. S. 405; Erwin Köstler: Ivan Cankar: Daten zu Leben und Werk. S. 143.
- (39) Vgl. z. B. France Bernik: *Ivan Cankar: ein slowenischer Schriftsteller des europäischen Symbolismus: 1876-1918*. Aus dem Slowenischen von Klaus Detlef Olof. München (Slavica Verlag) 1997. S. 257.
- (40) Maria Vera Claricini, S. 404.
- (41) 拙論「スロヴェニア文学事始——イヴァン・ツァンカルを手掛かりに」(國學院大學『國學院雑誌』第119巻第4号、2018年、1～11頁)、とりわけ1～3頁参照。
- (42) Ivan Cankar : Kako sem postal socialist. S. 114. Ders.: Wie ich zum Sozialisten wurde. S. 286.
- (43) Peter Vodopivec, S. 285.
- (44) Ebd. S. 301.
- (45) Erwin Köstler: Anmerkungen. In: Ivan Cankar : *Weißer Chrysantheme*. S. 449-501. S. 461. Anm. zu S. 75.
- (46) Vgl. Peter Vodopivec, S. 285.
- (47) Vgl. ebd. S. 284.
- (48) Ebd. S. 285.
- (49) Vgl. Erwin Köstler: Anmerkungen. S. 461. Anm. zu S. 75; Peter Vodopivec, S. 285.
- (50) Vgl. Peter Vodopivec, S. 286.
- (51) Vgl. ebd. S. 286.
- (52) Ivan Cankar: Kako sem postal socialist. S. 118. Ders.: Wie ich zum Sozialisten wurde. S. 291.
- (53) 拙論「オーストリア＝ハンガリー帝国下の一学校教師——イヴァン・ツァンカル『マルティン・カチュール』」(國學院大學外国語文化学科『Walpugis 2023』、2023年、41～54頁)、とりわけ44頁以下参照。
- (54) Vgl. Peter Vodopivec, S. 286.
- (55) Ebd. S. 290.
- (56) 大津留厚『【増補改訂】ハブスブルクの実験——多文化共存を目指して』(春風社、2007年) 58頁。

- (57) Vgl. Peter Vodopivec, S. 286.
- (58) 拙論「オーストリア＝ハンガリー帝国下の一学校教師——イヴァン・ツァンカル『マルティン・カチュール』」49頁以下参照。
- (59) Ivan Cankar: Ob Krekovem pogrebu. In: Ders.: *Zbrano delo*. 25. S. 143-144. S. 143. Ders.: Zu Kreks Begräbnis. In: Ders.: *Weißes Chrysantheme*. S. 330-332. S. 330.

